

あとがき

『禪門宝蔵録』との付き合いはもう何年になるのか。京都大学人文科学研究所で開催されていた柳田聖山先生主催の「禪の文化」研究班に出席させていただくようになって間もなくのこと、韓国円光大学の韓基斗教授が柳田先生のところへ研修に来られた。その時『宝蔵録』を読むお手伝いをしたのが始まりで、一九八〇年から八一年にかけてのことだった。八十一年四月の春の日、比叡山下坂本の韓先生の宿所で合宿し、自炊して『宝蔵録』を読み、合間に先生と一緒にのどかで古い歴史を持つあたりを散策したのを思い出す。

一九八八年、花園大学に国際禅学研究所が開設され、初代の所長に柳田先生が就任された。そこへ海印寺より申康洙・朴東亮の両師が研修に来られ、『宝蔵録』を読むというので、再び柳田先生よりお声がかかった。その際、日本人で唯一の高麗禅仏教研究者である中島志郎氏にも研究会に共に参加するよう呼びかけたのが第二ラウンドで、一九九一年十月～九二年九月のことである。

国際禅学研究所では一九八八年に第一冊目の研究報告（林信明訳編『ポール・ドミエヴィル禅学論集』）が出て、しばらく間があき、一九九四年に第二冊目（常盤義伸『ランカーに入る』一梵文入楞伽經の全訳と研究一）が出る。

恐らく第二冊目の研究報告が出る少し前の頃だったと思うが、『宝蔵録』の訳注と研究論文を報告書の一冊にすることになった。訳注は柳田先生が、注を私が受け持ち、研究論文については『宝蔵録』以前と以後におおよその研究範囲を分け、以前を中島氏が、以後を私が担当することにした。

註はこれまでの蓄積があつて早くにできたが、研究論文は一向にはかどらず、ずるずると今日に至つてしまつた。その間に中島氏は「高麗時代の禅宗史研究―崔氏武臣政権下の教宗と禅宗の動向を中心に―」（『青丘学術論叢』十、一九九七年）を発表されたが、本来は本書の研究論文にするつもりで書かれたものであり、更には「高麗の禅宗と『禅門宝蔵録』」（未発表、一部を本書に収録）をものされ、それらを讀ませていただいて、私の研究論文もなんとか形にまとめることが出来たものであり、本書の遅延は私一人の責任である。

また年度替わりには、本書の出版の遅れが問題になつたと聞いている。国際禅学研究所のスタッフの方々（川島常明氏、富士本久美子氏、宇佐美幸子氏）には多年にわたつて本研究報告の上梓にむけて、快くご協力をいただき感謝にたえません。

柳田先生には、私のような鈍馬を見捨てずに見守つて下さつたにもかかわらずこのような研究成果しか提出できなかったことに対して恥じるとともにお詫び申し上げます。

更に国際禅学研究所元所長西村惠信先生、同副所長沖本克己先生には本書の長年にわたる継統をお許しいただき衷心よりお礼申し上げます。

二〇〇一年三月吉日

於京都禅文化研究所 西口芳男